

発掘調査の概要

檜隈寺周辺の調査（飛鳥藤原第180次）

檜隈寺は渡来系氏族である東漢氏^{やまとのあや}が7世紀に建立したとされる古代寺院です。檜隈寺周辺を含めて計画された国営飛鳥歴史公園（キトラ古墳周辺地区）の整備事業にともない、奈良文化財研究所が国土交通省の委託を受けて2008年度から発掘調査を継続的に実施しています。

今回は檜隈寺金堂南側の丘陵上と、南東の丘陵斜面をその下部まで295㎡を発掘調査しました。檜隈寺周辺では、北・東側で古代の遺構が多くみつまっているいっぽう、南側の状況は良くわかっていません。今回の調査の主な目的は、回廊東南隅の状況や金堂南側の遺構の確認でした。

調査の結果、金堂南側の丘陵上や斜面下部では主に中世初頭の掘立柱建物や土坑・溝を、斜面中腹では古代の掘立柱建物・塀を検出しました。この地域は中世以降には水田化しますが、その過程で丘陵頂部の古代の遺構は回廊の一部を含めて削平され、中世以後の遺構が残されていきます。檜隈寺では平安時代後期頃、木塔跡に十三重石塔が建立され、講堂基壇の改修がおこなわれていることがわかっています。今回の中世の遺構も、この時期の檜隈寺の利用状況を示すものとして重要でしょう。

また、丘陵中腹には削平がおよんでいない場所があり、そこには古代に地山を削って平坦面をつくり、建物や塀を建てていたことが判明しました。一部の遺構は調査区外に延びています。こうした知見は、檜隈寺の南側において古代の遺構がどのように展開していたかを知る貴重な手掛かりとなるものです。

（都城発掘調査部 森先 一貴）



丘陵中腹での古代の建物と塀（東から）